

あの頃の根岸病院本館は、
重量感ある木造建築で
広大な庭園に続いていました。



吉祥寺病院 院長 塚本 一

吉祥寺病院は私の父、塚本金助が昭和 29 年に創立した病院だが、父の時代から松村英久先生にはお世話になっている。父は瞬間湯沸かし器とあだ名が付くくらいの気の短い男で、色々な方々とぶつかったと聞かすが、松村英久先生とは仲良くさせていだいたようだ。松村先生は穏やかで温厚な先生で、父のような気性の激しい男とも上手にお付き合いくださり感謝している。父は生前「人の保証人だけはなるな」と口が酸っぱくなる程私に話していたが、一度だけ「松村先生の保証人になら自分になってもいい」と言ったことがある。私は不思議に思い「なぜ松村先生の保証人ならいいのか」と父に尋ねると父は「松村先生は大金持ちだからな」と笑って答えていた。そんな父は私が大学 4 年の時に突然肺梗塞で亡くなったがその葬儀委員長も松村先生が引き受けてくださった。

私も父と同様に気の短い人間だが、松村英幸先生も私に優しく接して下さる。英幸先生は精神科医の先輩であると同時に安倍晋三総理の母校、成蹊学園の先輩であり、私も英幸先生と同じ小学校から高校まで成蹊学園で学んだ。成蹊学園には医師の子弟が多く、東京精神科病院協会の中にも成蹊出身者は多い。そのような関係もあり、親子 2 代にわたって親しくさせていただき本当に有り難く思っている。英幸先生には 23 年前、私の結婚披露宴の際乾杯のご挨拶をしていただいた。また今年の 4 月英幸先生のご長男である堯明先生（彼も小学校から高校まで成蹊）の結婚披露宴にもお招きいただき、歴史が繋がっていくことを実感している。

私が根岸病院へ初めて伺ったのは、根岸が新病院

に建て替えをする計画が進んでいた時期である。その当時の根岸病院は門の前に立っても木が鬱蒼と茂り、なかの建物の様子が見えない。門に入って樹木の間の道を進むとやっと本館が見えてくる。この本館が重量感ある立派な木造建築で歴史を大きく感じさせた。本館に入ると応接室に通され、応接室の窓からは広大なヨーロッパ風の庭園が見渡せ、とても病院に来ているという感じではなかった。この頃の根岸病院は分棟式で病棟が院内に散在していたが、現在の病院のたたずまいはハウステンボスを思わせる立派な建物にまとめられている。しかし、私が今でも印象が深く残っているのは、初めて訪ねた根岸の木造の本館とそれに続く広大な庭園である。

父の代から松村英久・英幸先生にはお世話になり、新・旧病院も思い出深い。もうひとつ根岸病院にはお世話になったことがある。それは、吉祥寺病院は父が引っ張ってきた病院で見方によればワンマン経営だった。その父が突然倒れ、全くの素人の母が理事長になった。素人がトップに立ったため病院の方向性が定まらず、職員の不安や不満が募り私が大学卒業後 3 年目に労働組合が突然できた時のことである。当院の組合は、根岸と同様に上部団体の医労連は共産党系で大変であった。私も医師に成り立てであり、また経営についても素人であったが団交には理事長に代わり出席し、右も左もわからない 20 代の若造であったために、随分絞られた。しかし組合との交渉で大変貴重な体験もでき、今の病院経営にとっても役立っており感謝している。

今後も松村先生をはじめ、根岸病院の方々に色々ご指導をいただければと願っている。